ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　居間には、既にこの道場に住んでいる人が、全員揃っていた。大きめの卓袱台には、親子丼と、その他漬物等が置かれている。

「おせーよ雅也。俺、もうお腹ペコペコ」

　居間に入ってきた雅也を見るなり、第一声がそれだ。声の主は、ひょろっとした、雅也より頭半個分背の高い男の子で、名前は『』。やや短めの髪の毛は、なぜか湿っている。

「良助、もしかして、また水遊びしてたの？」

　彼の隣に座って、呆れたような顔で、雅也が言った。だが、良助は首を横に振る。

「バッカ。遊んでねーし！　アリゲイツと一緒に、新しい戦術を考えてたんだよ！　濡れたのは、そのせいだって！」

　アリゲイツというのは、良助のパートナーである。水色の体と赤い、そして大きな顎が特徴の、まさに二足歩行の鰐といったところか。ついこの間ワニノコから進化して、強くなったばっかりなので、良助も新しい戦術を編み出すのに余念がないようだ。

「考えるのはいいけど、僕のポケモンを巻き込まないでよね？」

　やれやれと隣で溜息を吐くのは拓馬。きちんと正座して座っているが、その太ももの上には、チコリータが葉っぱをグッタリさせて、うずくまっていた。拓馬はその葉っぱを丁寧になでている。

「悪い悪い。まさか、あんなところにお前らがいるとは思ってなかったんだよ」

　手を合わせて謝る良助。どうやら事故で、拓馬のチコリータがアリゲイツの新技、もしくは新戦術を被弾したらしい。

「全く、あの場に奈央がいなかったら、どうなっていたことやら……本当にありがとう、奈央」

　拓馬が自分の隣で行儀よく座っている女の子に言う。栗色の、雅也より強くウェーブのかかった、可愛らしい女の子は『田島奈央』。奈央は、拓馬にニッコリと微笑む。

「ううん。チコリータに大事が無くて良かった。流石、ちゃんと鍛えているだけありますね」

　口から出る、しっとりとした丁寧語は、おおよそ子供とは思えない。だが、田島辰巳の弟子ではないとはいえ、奈央はここじゃ最年少だ。何度聞いても大人びているその言葉遣いに、三人はいつも舌を巻く。

「皆揃っているようだな」

　居間の入口から、田島辰巳が入ってきた。ちゃんと中に全員揃っているのを確認し、雅也と奈央の間に座った。

「じゃあ、食べようか。いただきます」

「いただきます！」

　田島辰巳のその言葉に、他の四人が、そしてその後に、彼らのポケモン達の鳴き声が続いた。

「よしっ！　じゃあ、行こうか！」

　お昼ご飯も食べ終わり、ちょっと休憩したのち、雅也は外に出ていた。その隣には、ピチューと、そのピチューの倍近い背の高さの青いポケモンが一匹。はもんポケモン、リオルだ。雅也のもう一匹の相棒である。ちなみに性別はどっちもオスだ。

　雅也はもう一度靴ひもをきつく締め直す。

「よし、おっけー！　じゃあ、よーい……どん！」

　その掛け声と共に、一人と二匹は走り出す。別に競争するわけではないが、雅也の掛け声は、いつもこれだ。ちなみに、ピチューとリオルは、あっという間に雅也を引き離していく。毎度毎度のことだし、そもそも人間とポケモンは体の作りが違うから仕方ないが、よく体力がもつなと、雅也はいつも感心している。

　彼等は田島道場の周りのコースを走っているが、距離的には、大体一キロくらいだ。ちなみに、『道場周り』と言っても、走っているコースは厳密には道場の敷地の中に食い込んでいる。ちゃんと敷地の周りを走るとどれくらいになるのか雅也は分からないし、この道場の師範である田島辰巳でさえも、実は把握していない。それくらい広いのだ。齢五歳の雅也にしてみれば、一周走るだけでも相当な運動量になる。

　あっという間に二匹が見えなくなると、雅也はペースを上げた。こういうことをすれば、すぐに息が上がるのだが、あまり雅也は気にしていない。彼にとって、独りの方が、よっぽど困るのだ。

　ここの道場に住んでいる子供達、つまり、雅也・拓馬・良助・奈央は、実は捨て子である。田島辰巳は結婚出来ず、それでも道場の跡取りがいないと困るため、養子をもらうことを決断した。その時、孤児院から引き取ったのが、当時まだ一歳だった良助だ。良助の苗字が『田島』なのは、田島道場の正式な跡取りだからである。

　だが、本来ならそれで子供は十分だったのだが、思わぬ出来事が、その数ヵ月後に起こった。道場の、あの古めかしい門の前に、小さなダンボールが置かれていたのだ。しかも、中から赤ん坊の鳴き声がする。慌ててダンボールを開くと、その中にいたのが、同じく一歳の拓馬である。名前と年齢が分かったのは、拓馬と一緒に、ダンボールの中に母子手帳が入っていたからだ。だがそこには、生まれた病院も、さらには親の情報も一切書かれていなかった。書かれていたのは、あくまでも拓馬の情報だけである。

　不測の事態は、まだ続く。次の日、拓馬の親を探すのに東奔西走していた田島辰巳だったが、川岸で、昨日聞いたものと、似たような声を聞いたのだ。嫌な予感がして、音の発生源に近づくと、予感の通り、ダンボールの中で赤ん坊が泣いていた。それが雅也であるのだが、こちらには母子手帳の類は一切なく、この名前は田島辰巳が付けたものだ。ちなみに年齢が０歳だと分かったのは、田島辰巳の知り合いに、そういうことを調べる専門家がいたからだ。

　ダンボールの様子から、捨てられてから数日が経っていることが分かったので、生まれたばかりの赤ん坊は、本来なら死んでいてもおかしくないはずなのだが、そうはならなかったのは、単に雅也のパートナーであるピチューとリオルのお陰だ。なんとも救いのない話の中にも、神はいたらしい。まだ野生のポケモンだったにも関わらず、ピチューとリオルは、あの手この手をつくして赤ん坊の世話をしていたらしかった。

　その時の田島辰巳の最善の行動は、イレギュラーで拾った二人の子を、孤児院かどこかに預けることであろうが、彼はそうしなかった。正式な後継には出来ないが、それでも自分の全てを、良助と同じように二人にも教えたいと思ったからだ。力をつけた二人が、いつか自分を捨てた親に復讐出来るようにするためではない。なんとなくだが、身勝手な大人のやることが、これから先も、この二人を襲い続けると感じたのだ。その時、二人がまた不幸な目に合わないように、闘う力をつけて欲しいと、そう思ったからである。勿論、ここら辺の思いは、まだ田島辰巳は雅也にも拓馬にも話していないので、二人は知らないのだが。

　しかし、奈央だけは、ちょっと特別な事情があって、あの道場に住んでいる。そのお話は、また別の機会だ。実は、田島辰巳と奈央以外の三人も、なぜ奈央が道場にいるのか知らない。聞きたい気持ちは三人にもあるのだが、聞いちゃいけないような気がして、三人がその話題に触れたことは、最初に疑問に感じた時以外、一度もない。

　いつしか三人とも、その疑問を綺麗さっぱり忘れていて、今じゃ、血は繋がってなくとも、仲のいい兄弟のようになっている。